

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 三浦哲哉

三浦哲哉氏の博士号（学術）学位請求論文『サスペンス映画論』は、映画史初期から今日までのハリウッド映画におけるサスペンス表現の歴史の変容を辿りつつ、映画という表現媒体の本質に直結するこのサスペンス（宙吊り状態）という概念の理論的究明と新解釈をめざした、野心的労作である。

従来、サスペンスは、観客に想像的な願望充足の快楽を与えるという娯楽目的に奉仕する副次的要素と見なされてきた。三浦氏はサスペンスを、その解消すなわち「カタルシス」の瞬間を通じてのみ有意味化する過渡の様態としてではなく、「宙吊り」の持続それ自体の強度として、またそれが観客に強いる絶対的な「受動性」と「無能力」の情動体験として捉えるという視点を提起した。三浦氏の本研究は、この「サスペンスの自律性」という命題を、D・W・グリフィスからクリント・イーストウッドに至るアメリカ映画史の「サスペンス映画」の系譜の精査によって緻密に検証し、その射程と有効性の論証を試みたものである。

本論文は全六章から成り立っている。第一章ではD・W・グリフィスにおける「並行モンタージュ」の時間構造が、第二章では無声時代のバーレスク喜劇映画と技術史における同時代の「全面的機械化」現象との関係が、第三章ではフリッツ・ラングにおける全体主義と無意識の関係が、それぞれ考察される。以上の三章から成る第一部は、一九三〇年代までのハリウッド映画におけるサスペンスの変容と深化の過程を、その多様な広がりにおいて明晰にまた精密に記述することに成功している。

後半の第二部は、「サスペンス映画」というジャンルが成立した一九四〇年代以後を扱う。第四章で、オーソン・ウェルズとジャック・ターナーにおける「見ること」それ自体の批評化、すなわち視覚行為の形式的な「自己再帰性」が分析された後、第五章において、サスペンス表現の完成形を提出したアルフレッド・ヒッチコックの作品の映画史的意義が精密に検討される。「いまだ」と「すでに」の間で宙に吊られる「未来完了形」の時間の諸相をヒッチコックの諸作品の系譜の中に探っていくこの第五章は、本論文の圧巻と言ってよい。

それを受け、締め括りの位置に置かれた最後の第六章は、「ヒッチコック以後」——すなわちヒッチコックとともに飽和状態に達したサスペンス表現が、効率的に機能する透明な説話技法から、映像それ自体のスペクタクル効果へと移行した一九六〇年代以降の映画史が扱われる。そこでは「スペクタクルの時代」において不透明な混濁を強いられることになったサスペンスが、二一世紀に入った現在までどのように生き延びてきたかが俯瞰されるが、中でもサスペンスの「セノグラフィー」の効果的な更新を図った映

画家としてクリント・イーストウッドの作品の歴史的意義が強調される。

百十数年に及ぶ映画史の全体を視野に収め、その流れをほぼ時間継起に沿って辿り直した研究でありながら、論述に粗雑さや散漫さの印象がなく、サスペンス概念の変容を示す「力線」がくっきりと浮かび上がっているのは、三浦氏に透徹した史的認識と堅実な理論視座があり、それに基づいて、扱うべき監督と作品の選択が厳密に行なわれているからである。グリフィスの傑作『ドリーの冒険』（1908年）は幼い少女の誘拐と発見という題材を扱うが、この無声映画の傑作をその初期に持つ映画史は、ほぼ一世紀後、やはり誘拐された（ただし発見はされないまま終る）子供の悲運を主題とするイーストウッドの『チェンジリング』（2008年）に逢着することになる。本研究は、映画におけるサスペンスの問題を、この二つの「誘拐映画」に枠取りされその間に広がる一世紀の時間の中で、その理念的な「自律性」と歴史的な「多様性」において捉え、詳細な作品分析を通じて記述し尽くそうという壮大な試みである。こうした総合的な視点に基づく研究はこれまでアメリカ本国にもなかったもので、その学術的意義はきわめて大きいと言わなければならない。

また、個々の論点に関して英米圏の最新の研究を着実に咀嚼し、批判的に摂取しており、そのうえで三浦氏独自の判断が示される分析のアプローチと方法論は、きわめてオーソドックスなアカデミズムの手法を示すものでありながら、論文の文章自体は、昨今の映画研究にありがちな晦渋さを免れ、しなやかな魅力に溢れた風通しのよいもので、「サスペンス映画の歴史」ないし「サスペンスをめぐる映画史」として一般の読書人にも十分に受け容れられうるものとする。

審査においては、サスペンス概念の理念的追求にやや深さが足りないこと、とくに「無能力」の概念についてはより徹底的な考察が必要なこと、対象のコーパスをアメリカ映画に限定することがいかに正当化されるかに関して疑問が残ること、それと関連して母国の外に放逐されたアメリカ映画人（ロージーやフラーらいわゆる「五〇年代映画作家」）への目配りが乏しいことなど、いくつか批判や疑念が提起された。また、論旨がおおむね明晰な第五章までと比較して、最終章の記述がやや粗く、視点がいまだ不安定なゆえの混乱があるのではないかという指摘もなされた。しかし、これらは本論文の学術的価値を損なう決定的な瑕疵とは言えないという点で、審査員全員の意見が一致した。

以上を鑑み、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。